

2019年度(平成31年度)学校評価自己評価表

城北中学校区	校番 56	福山市立久松台小学校
最終更新日		2020年(平成2年)2月5日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	思考力・判断力・表現力、主体的に学ぶ力、他者とかわる力、社会貢献力、自己形成力
学校関係者評価報告書は全項目「十分満足できる」と評価された。中学校区で連携を深め、共通の取組で成果をあげている。目標が達成できていないものについては、取組の進捗状況を細かく把握し、課題克服に向けてPDCAサイクルに則り実践する。	全国学力・学習状況調査の結果、小学校は県平均を概ね上回り、中学校は県平均程度となっている。また、校区共通で取り組んだことで、「あいさつ」、「地域行事参加」などの意欲は向上してきている。睡眠時間、学習時間の確保がメディアの使い方と併せて課題となっている。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	じっくり考え、はっきり表現し、くり返し粘り強く挑戦する児童・生徒 (J) (H) (K)
		中学校区として統一した取組等	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的な生活習慣や家庭学習の目安を示した校区スタンダードの取組</li> <li>毎月15日にあいさつデーとして校区合同挨拶運動の取組</li> <li>中学校のテスト期間に合わせて家庭学習頑張り週間とノーメディアデーの取組</li> <li>合同行事・乗り入れ授業・「総合的な学習の時間」発表会の取組</li> </ul>

III 自校

ミッション
未来を切り拓く「生きる力」を育成する 「すべては子どもたちのために」を基底に据え、学校・保護者・地域が連携し、「この学校へ来てよかった」「この学校へ来させてよかった」といわれる学校に
学校教育目標
自ら考え 正しく判断し 行動する 感性豊かな子
現状
<p>&lt;児童生徒&gt;</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全国学力・学習状況調査の「国語・算数」では全国平均・県平均を上回り、基礎的・基本的な学力は十分定着している。</li> </ul> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>複数の資料を関連付けて説明する力が弱い。</li> <li>自分から課題意識をもって、学習する児童の割合が低い。</li> </ul> <p>&lt;授業&gt;</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分でとらえたキーワードを使って考えをまとめる際に、図・表やグラフ、事象と関連付けて表現できる児童が増えてきている。</li> </ul> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教師が説明しすぎてしまう。</li> <li>対話的な活動を通して考えを深めたり、広げたりする学習展開が確立されていない。</li> </ul>

育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	主体的に学ぶ力	表現力	他者とつながる力	社会や自然を大切に する心
めざす子ども像	<ul style="list-style-type: none"> <li>わくわく感を持って授業にのぞんでいる。</li> <li>自ら問題解決しようとしている。</li> <li>自ら進んで課題を見し、問題解決しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>既習内容や経験を活用しながら自分の考えを伝えることができる。</li> <li>自分と友達の考えを比較し、共通点や相違点を見つけることを通して根拠を明確にしながら自分の考えを伝え、考えを広げたり、深めたり示し、よりよい考えを生み出すことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>反応しながら聞くことができる。</li> <li>友達の考えを大切に受け止めることができる。</li> <li>友達の意図を汲んで自分の考えを伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な社会や自然に親しみ、やさしい心で接する。</li> <li>身近な社会や自然に親しみ、自分との繋がりを大切ににする。</li> <li>身近な社会や自然に進んで関わり、自分とのつながりを大切にする。</li> </ul>
研究	教科等	理科・家庭科(生活科)		
	主題・内容等	主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～関わり合い、自分事として考え、実生活にいかせる子どもの育成～		
めざす授業の姿	<p>【主体的な学びのある授業】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自ら課題を見つけて問題解決をする中で、新たな知識を得たり、深めたりすることに楽しさを感じている。【国】</li> <li>生活経験や既習事項と結び付けながら、自分の考えを資料や文章、話の組立てなどを工夫して説明しようとしている。【表】</li> <li>自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりしようとしている。【他】</li> <li>身近な社会や自然と関わりながら、自分の衣食住生活等について考えたりしようとしている。【社】</li> </ul>			

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立久松台小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	力付評価	達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	力付評価	達成評価	総合評価	改善方策
4	自ら考え学ぶ児童の育成と基礎学力の定着	★	見直し	主体的に授業に取り組む児童生徒	繰り返し場面で、切り返しの発問・教具の工夫などを通して学び合いを充実させる。	自ら考え、工夫して表現しようとしている児童の割合 1学期：40% 2学期：50% 3学期：60%	自ら考え、工夫して表現しようとしている児童の割合は48.7%であった。	4	3	教師は、繰り返し場面で、「比較」を意識した発問をしたり、よい教材を提示したりすることで、児童が自分の考えを表現できる環境を整える。	□自ら考え、工夫して表現しようとしている児童の割合は58%であった。児童が自分の考えを表現できる環境を整えようとしている教師の割合は86%であった。指標に対する達成率は96%。 ◎主体的に取り組む児童は増えてきている。	4	3	3	引き続き、教師は繰り返し場面で「比較」を意識した発問をしたり、よい教材を提示したりするために、教材研究を継続する。
				基礎学力が定着している児童	スキルタイムを充実させる。ドリル・難問・言語技術の年間計画を立てて実施する。	全国学力・学習状況調査、標準学力調査及び単元テストの平均点が、全国平均よりも3ポイント上回るようにする。	全国学力・学習状況調査の国語科では7ポイント、算数科では6ポイント上回った。単元テストの国語科では12クラス9クラス、算数科では、3クラスが3ポイント上回った。	3	3	算数科の中でも特に図形領域が弱いため、スキルタイム等で重点的に扱い、改善を図っていく。授業では、子どもたちが学び合うことのできる授業を創造する。	□単元末テストの国語科では12クラス中8クラス、算数科では4クラスが3ポイント上回った。スキルタイム等で、図形領域の問題を扱うなど、改善を図った。 ◎全国平均を下回っているクラスはほとんどなく、基礎学力は定着している。	3	3	3	学力テストの結果を分析することを通して、進級までにスキルタイム等で苦手領域を重点的に扱い、改善を図っていく。
4	主体性の育成		見直し	主体的にあいさつができる児童	毎月一回あいさつ強化週間を設け、あいさつの評価を行う。あいさつカードの数に応じて表彰を行う。	あいさつ名人になった児童の割合 1学期：60% 2学期：70% 3学期：80%	あいさつ名人となった児童の割合は27%であった。	2	2	確実にあいさつカードを集計し、正確な人数を把握する。あいさつ委員会を中心としたあいさつの推進を強化する。引き続きあいさつ名人の表彰を行う。あいさつ達人以上は写真を掲示して評価する。	□あいさつ名人となった児童の割合は全校児童の70%であった。指標に対する達成率は87%。 ◎あいさつを校内でする児童は増えてきているが、地域において、主体的にあいさつをするに課題がある。	3	3	2	児童が主体的にあいさつをするために、カードの意欲づけのみで終わらせず、あいさつを主体的にできている児童の名前を放送したり、写真を貼ったりして取り上げ、評価していく。
				人に優しく関わることのできる児童	QUを活用し、児童の自己肯定感を高める取組を充実させる。	QUアンケートで、学級生活満足群に属する児童を70%以上にする。	1学期の全校学級生活満足群に属する児童は、73.5%であった。	3	3	児童一人一人と話す時間をとることや、児童一人一人の課題を担任、本人、保護者で共有し、自己存在感をもたせ、成長を実感させる取組を行う。	□2学期の全校の学級生活満足群に属する児童の平均は、74%であった。達成率は105%。 ◎学級での取組を職員で交流したことが効果的だった。	3	4	4	QUアンケートの結果をもとに、個々の課題に向き合い、個々に応じた対応を職員同士で助言し合い、個々に応じた自己肯定感を高める取組を進める。
4	たくまし		継	体力づくりに主体	授業等で継続的に体力づく	新体力テストで	新体力テストで県平均以上の項	3	3	ソフトボール投げ、握力、50m走に課題が	□全学年が体育の授業で、ボール投げや50m走に取組ん	3	3	3	重点課題について今後も年間を通し

	く生きる 体力の向 上		続	的に取り 組む児童	りに取り組 む。家庭での 体力づくりの 課題に取り組 む。	県平均以上を 65項目以上 にする。	目は53項目だ った。			ある。柔らかボールを 使った投の練習、グリ ップを使った握力練 習、50mコースを使 った8秒間走の取組 を引き続き行い、走力 の向上に取り組む。家庭 での体力づくりの課題 を継続して取り組む。	だ。再測定の結果、握力、5 0m走、ソフトボール投げで 12項目が県平均以上とな った。合計65項目到達し た。 ◎8秒間走やキャッチボール などを通して、再測定に向け て自己の記録を伸ばそうと 体力づくりに主体的に取り 組む児童が増えた。				て取組んでいく。児 童が運動の記録か ら自己の目標を設 定し、縄跳びやマ ラソン等、主体的に目 標達成に向けて取 り組めるようにし ていく。
			新規	基本的生 活習慣が 定着して いる児童	早寝早起きカ レージカード・食 育朝会・ミニ保 健を実施す る。	朝食アンケート で「黄・赤・緑 の食品」がそろ った朝食を食 べている児童を 60%以上にす る。	朝食アンケートで は、「黄・赤・緑 の食品」がそろ った朝食を食 べている児童は 57%だった。	4	3	学期に1回の早寝早起 きチャレンジカードに 引き続き取り組み、規 則正しい生活の啓発を 行う。委員会活動で朝 会時に朝食レシピの紹 介を行い、食に関する 関心を高める。	□年間を通して朝食のとり方 について発信した。朝食ア ンケートでは、「黄・赤・緑 の食品」がそろった朝食を食 べている児童は62%だった。 指標に対する達成率10 3%。 ◎早寝早起き朝ごはんを意 識する児童が増加した。	3	4	4	栄養教諭と連携し、 家庭科や特別活動 などの教科学習に おいても、バランス の良い朝ごはんに ついて指導し、望ま しい生活習慣を定 着させる。
4	授業力の 向上	★	見直 し	授業づく りについて主 体的に研修す る教職員	授業者は学び づくり案を作 成して授業を 実施し、児童 の反応をもと に研修を行 う。	一斉研修での 学びが授業改 善に役立った と感じている 教職員を 70%以上に する。	一斉研修での学 びが授業改善 に役立ったと 感じている 教職員は 93.3%であ った。	3	4	授業研究に継続して取 り組むとともに、「主 体的・対話的で深い学び」 のイメージの共有・実 現に向けた研修を継続 していく。	□一斉研修での学びが授業改 善に役立ったと感じている 教職員は100.0%であ った。 ◎児童の反応をもとにした研 修の積み重ねが授業づく りに効果的だった。	3	4	5	生活経験や既習内 容を活用し、学習 内容と関連付けな がら学べるよう にしていく。
4	地域貢献 できる児 童の育成		継続	地域のこ とを考え、主 体的に行動 できる児 童	各学年で計画 を立て、学校 だより等で、 行事参加の呼 びかけをす る。	学年で年1回以 上、個人で年 1回以上地域と のつながりを 意識した活 動を行う。	各学年での実施 は4学年、個人 では、95%の 児童が、地域 とのつながり を意識した活 動を行った。	3	3	各学年については、計 画に沿って取り組んで いくとともに、地域行 事について児童に呼び かけをしていく。	□学年では、6学年中4学年が 活動を行った。残り2学年に ついては、2月中に活動を行 う予定である。個人では、9 8%の児童が、活動を行 った。 ◎地域のことを考え、主体的 に行動できる児童が増えた。	4	4	4	今後も、地域行事 や学校での取組 を紹介し、地域に 愛着をもち、地域 のために行動 できる児童を 育成してい く。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。